

2012 年度森泰吉郎記念研究振興基金 研究成果報告書

研究課題名：日本の政党制と立法過程

所属：政策・メディア研究科 修士課程 1 年

研究代表者：大西友貴

## 1、研究の背景

2007 年の参院選挙以来、衆議院と参議院の多数派が異なる、いわゆるねじれ国会の状態が続いてきた。結果として、衆議院で法案が可決したとしても参議院で法案が可決されない可能性が生じるようになった。つまり、政府与党が重要法案を成立させるためには野党の合意が必要となったのである。法案の帰結がより政党間競争に左右されるようになったと理解できる。

このような時代背景から、研究代表者は、政党間競争が立法過程の帰結にどう関わっているのかを明らかにする必要があると考えた。現在、自民党と民主党を軸とした二党制が成立しており、一方が与党であるときの他方の立法行動を明らかにすることで、現代日本政治への理解に貢献できると考えたからである。

## 2、研究目的

本研究の目的は、政党間競争を新制度論のアプローチで研究することである。新制度論を用いることで、政党だけではなく政党の行動を限定する議会制度をも含めて分析を行うことができるからである。特に、本研究では、野党が多数主義的な日本の議会制度の中でどのように立法過程に関与するのかに焦点を当てた。

## 3、研究の進捗状況

### 1) 日本の議会制度

日本の議会制度の研究状況をまとめた。日本の議会制度が多数主義的であること、多数主義的でありつつも議院内閣制の典型の国とされるイギリスと比較すると、少数派が影響力を行使する余地が残されていることを確認した。

### 2) 粘着性

日本の国会研究で野党の影響力を考えるときの代表的な概念である粘着性についてまとめた。粘着性とは、野党が内閣提出法案の審議を遅らせたり、修正したり、審議未了とさせたりすることである。

## 4、今後の予定

現在、日本の議会制度の研究成果を用いることで、粘着性の批判の方法を考えているところである。